心中重井筒

近松門左衛門作

上歌 夜さ来いと。いふ字を金紗。で。縫は せ。裾に清十郎と。寢た所。オクリ裾に。清十郎とねずみ色。地京の吉岡紙子染。フシや ぼてり栃か。薄栃か。正月前の際々に旦那殿は外が内。御神酒過してうか〳〵と山業といへば目が見えず。内に居やんす内儀樣此方人ばかりに打任せ。誂へ物も節季をも。どう仕舞はんす事ぢややら。フシ下心の惡い旦那殿。詞やい三太そりや何ぢや。茶屋へ行きやろが山業を買やろが。旦那は旦那此方人は紺屋の手間取。何事もさらりつと淺黄にいうて居よいやい。ヲヽ喜兵衛のいやる事なれど。我が身は本を知るまいが。地體旦那の下染はの。重井筒屋といふ南の茶屋の弟で。地これへは入聟乳呑み小紋を持ちながら。人の海松茶も構ふにこそお内儀は結構者。柳煤竹にやつてぢやが。隱居の親仁が來ると。家内はしみ郡山染になるわいの。あのやうにほついてはやンがて身代は。木賊色でおろすやうにフシなつてのけうと笑ひける。地酒遣に水も盡くかや我が宿へ。歸り紺屋の德兵衛急がしけに立歸り。詞これ庄介喜兵衛。埒が明かぬの〳〵。これにまだかゝつてか。何時ぢやと思ふ今日は師走の十五日。中の島の贈物ものも昨日限の約束。谷町の蒲團もまだ持つて行くまいな。兄貴から誂への重井筒の暖簾も。地遲いと言うて腹立ちや女房どもは何處へ行た。エヽ鈍氣な一言俺が言はねばもうそれ程間があく。言ひ付けも見廻しも口は一つ目は二つ。これでは水も飲まれぬと フシ言うた所は見事なり。地下人どももはいつもの事。詞お内儀樣は槍屋町の姉樣へ。ちよつと行つて來う程に。お前に問うて蒲團地も持つて行けとの事といへば。地そんなら喜兵衛持つていきや。庄介は提燈持つて女房どもを迎ひにいけ。それ坊主めに怪我さすな負うて歸れと言ひ付くれば。あいあいいふもそこ〳〵ながら フシ皆々表に出でにける。地亭主も辻迄行くかと見えしが三十ばかりの女房と。何やら呟き呟きてオクリ連立ちへ内に入りければ。地女は亭主と座を組みて。お家樣顏して居たりける。年季の三太すつきりと合點せず。じろ〳〵見るを德兵衛これ三太こゝへ來い。つつと寄れと膝許へ呼びつけ。詞こいつはずんど利口者で言ふなといふ事は言はぬやつ。地それで人が可愛がる近付になる印に。何ぞ遣つてたもといへば彼の女さうやらして目許が利發に見えまする。何と顏見世見やつたか札買やる錢遣ちうか。但し何ぞ餘の物がフシ欲しいかいの言ひければ。詞イエ〳〵私

等芝居が見たけりや。六軒町の兄御様からなんぼ行かうと任ぢや。私や銀が欲しいといふ。ムゝ銀持つて何買やる。アノ銀貰うてか。銀貰うてから其のかねで。よそ〳〵のお山が一つ。地買うて見度いとやらるゝぢやと フシ身をすくむ。詞これは出來いた易い事〳〵。して誰ぞ惚れたのがあるかサア言へ〳〵と。問ひかけられて恥かしがり。私が惚れたのはいろはの内にあるといふ。ヤアそんならばいろは茶屋か。イエ〳〵太左衛門橋筋に。何ぢや太左衛門橋にいろはとは。ちりぬるをわか。よたれそ 地つねなと吟じ返せばそれ〳〵。その次のらむ フシうげんだとぞ答へける。地これは上物上目利と豆板一粒はつとはづみ。詞ヤイ今こゝへ金持つて來る人がある。此の女子茶をお内儀様かといふ程に。必ずいゝやと言ふなる。扨この事を女どもにも傍輩にも。徴塵も言ふ事ならぬぞ合點かと言ひければ。三太郎頷き勿體なや〳〵。地いふ事では御座りませぬ。若しも重ねて言ひ度い心出來た時々に。お前へそつと斷りませう程に。又銀を下さりませと。阿呆な顔でも損をせぬフシ遣る粋よりは粋ならん。地時に表に貽みましよ。紺屋の徳兵衛殿は此方かと。地年配なる人體なり。ヤア治右衛門様かお這入りなされ フシ御免といひて通りける。詞あれ女房ども内々の治右衛門様。其方の刺ら銀貸さうと仰しやる。地お目にかゝつて置きやといへば言ひ合せてや彼の女。これはまあ〳〵御懇親な。尤も家も商賓も私の物とは申しながら。子なかなしたる仲なればもう今では屋財家財。皆主の物で御座りまする。かうお目にかゝる上からは私が請合。深しい事こそ此の家屋敷相應に。三貫目や五十兩は貸して遣つて下さいやせと。褄々合せる辯舌に口入喰うた顔付にて。詞アゝ〳〵これには及ばぬ事ながら。徳兵衛殿は入家と聞くが致せば後のため。地又も用を聞かうためサア判をなされよと。手形を出せば徳兵衛。懸硯引寄せこれ其方の判。さらば先づ私とオグリ互にへ印判 フシ明白なり。地丁銀四百目包の通り吟味なされと受取り渡しもう暮れまするお暇申そ。詞ちとお盃致しましよ。地重ねて〳〵預けます フシさらばと言ひてぞ歸りける。地さつと濟んだ目出度しと銀懐中に押入れ。詞これ三太。此の女子衆を送つて。ちよつと行つて來る程に門も閉めて火も點せ。地其のうちお辰が戻つたら湯屋へ行つたと騙して置け。必ず何にもぬかすなと。口を止めたる紺屋糊 フシ徳様早うと出でにけり。地所帶持つても色はなほ捨てぬぞ道理紺屋の妻。月も冴え行く夜嵐にあゝ提燈もよいわいの。宵寢まどひの小市郎竹が脊中にふら〳〵と。寢風引かすな大事の子 フシ萬年町に歸りしが地問ひもせぬに三太郎。旦那様はたつた今湯屋へと言へば。ヲゝ〳〵どうで湯か茶か呑みにであろ。法界の男ぢやと思へばすむと恨みながら。小市郎が目覺す

を。暖簾の奥の小座敷にオタリやう〳〵賺し寝入らせて ッシ我も着る物。詞着かへんと押入開くればこりや何ぢや。懸硯あけ廣げ夫婦の印判取散せり。これは〳〵と言はんとせしが四邊を見廻し押靜め。詞こりや三太郎そちに大事の物やらう。火を點して奥へ來いといふより早くあい〳〵〳〵。地さらばしこだめ參らうと小行燈提げ入る有樣。下女手間取は見送りて内儀樣と旦那の仲。あちらへ支へこちらへ言ひ兩方で物を摑み居る。彼奴は鋸商と。鋸屑の言ひがひなき ッシ猜みも下の役ぞかし。地此の家の隱居吉文字屋の宗德。代々傳る紺屋の形と共に禿げたる頭を下し。額に絶えし古毛拔喰ひかねぬ世も算用づく。此の家屋敷家職をば妹娘に槍屋町。姉にかゝりて隱居分薪の始末慾心を。日暮れて一人によつと來る内の者どもあれお辰樣。槍屋町の隱居樣の御出でといふ聲に。おうと言うて立出づる宗德尖り聲にて。詞人聟殿は何處へぞ。節季師走内をあけて出るとても出す者が。これ二人めの聟ぢやぞや。あの孫の小市郎に父親三人持たしやんなと。地いふ顔の不興なれば優しくも女房は。夫の惡性押包み。詞なんの餘所へ行きましよ。方々の贈物も内外の者の手は足らず。今朝早々から仕事して。風引いて頭痛するとて奥に寢て居られます。お前は何しに御出でといへばいやコレ只は來ぬ。詞たつた今其方が歸つた其の跡へ。堀江の口入治右衞門といふ者ぢや。此方の娘御聟殿兩判で銀四百目貸しました。若い人の事なれば。後日の念にちよつと知らせて置きますと言ひ置いて歸られた。聞くと俺は目が眩うて一服の藥を呑みさいて來た。地四百目といふ銀は何にするとて借つたぞ。喰ひ込んだかへこんだか女夫の仲の棼糯遣か。エヽおとましや身代は得持つまい。詞俺が談義參りして一文投ける賽錢さへ。進ぜうか進ぜまいかと。疊算置いて見て。たとへ算が合うても五度に三度は投げずに仕舞ふ。側に居る同行衆がぐわら〳〵投げる時には。錢を一文つまんで肩へ手をかう振上げ。地投げる顔で鹽の長次郎錢は手に止つた。かう氣轉を利かせねば過ぎにくい身代。四百目は何にしたッシ行き端を聞かうときめらるゝ。地女房扨は丁稚めが話に違ひなしと。思ひ當れば妬ましさ奪ぞ言うてのけうか。いや〳〵それも惱い事。どうかかうかと急き來る間にスエテ先づ先立つは夫の可愛さ。詞アヽ親仁樣何ぞと思へば仰山な。私等女夫が何に借錢しませうぞ其の銀はな。南の兄御の方に。廓から出た好い奉公人を抱へて。手附銀が遣り度いが世間ともに銀づまり。あの邊は利も高し殊に兄御は病中なり。私等が判では貸す人あるとの頼みやう。地銀こそはなるまいし判つぐ程は一門がひ。殊に私と他人なれば猶しも義理は缺かれず。又用無心もある物とそれで判をしました。内との者も聞くぞかし。千里萬里も違うたか。あんま

りな親仁様と フシ陳ずる心のやさしさよ。地徳兵衛は女房の歸らぬ先にと足早く。門口に立ちけるが内には舅の喚き聲。南無三寶と入りもせず暫く樣子を窺ひける。詞舅なほも納得せずヲヽ女夫が言ひ合せ。親を騙して身代潰せ。地寢てゐるも嘘ぢや何處へうせたと穿鑿す。はてなんの留守なら留守と言はひでは。あれ喉籠のあちらへと。指させば宗德は。喉籠うち上げ。孫の事は氣も付かず老眼の何見てか。詞ムヽウ。先づ職人に似合はぬあの

賛付が氣に入らぬ。頭痛のする寢やうでない。地又くらひ醉うたか春は早々まくし出しや。あのやうな狸なら廿人や卅人は今の間に取つて見しよ。三日と一人寢させはせぬと呟きく〜雪踏はく。内の者どももうお歸りなされますか。詞送りませうと言ひければ。ヤア道ならちと送つて。それ言ひ立てに夜食くはうといふ事かと。地門の戸明くれば德兵衛虎落の蔭に隱れしを。それとも知らで歸りしはオヤ〜あやふへ かりける次第なり。地入れ違う

て徳兵衛つつと通つて羽織を後へひらりと投げ。實事の格は見覺えたり女房の膝許にむんずと居て。詞こりや最前からの次第門口に聞いて居た。留守の俺を寢てゐると。親仁の手前は男を庇ふやうなれど。職人に似合はぬ鬢付な男を。身代りに寢させたは念が入つて忝い。入聟の事なれば家屋敷家財にも。芥子程も瑕はつけまいがうぬが命に傷つける。地たつた今間男を引摺り出して見せうぞと。奥に飛び込み何かは知らずわつと叫ぶを胸ぐら攫み。宙に提げ躍り出でどうど引つすゑよく見れば。こは如何に坊主頭の小市郎盆に買うたる鯆の鬘。奴頭を振りながらかゝ様怖いと泣き居たり。徳兵衛も仕舞つかず言葉なければ女房は。宵より積る憂き涙スエテ一度に。わつと叫び伏し フシ消え入る。ばかりに泣きけるが。地なう徳兵衛殿慾うござる辛いぞや。不義せうものと見据ゑたら。なぜ附き張つても フシ居もせいで。元日から元日迄よう行き處嬉しからうか。男と男の恥よりも隱してもある事ぞ。此方の留守の言譯にふつつりと事は缺く。隱居樣の聲と聞き側にあつたを幸に。此の子に被せて間を渡したも私が智慧ではあるまい。氏神樣のなされたと有難う思へども。恨受ければ フシ是非もなし。地女房の口から推參ながら言はば此方は人でなし。房と挨拶切れぬけな餘所ほかでもある事か。兄御の内の奉公人狭意見もすべき身が。客衆とやらの妨になり身代の妨と。兄嫁御のねすり言スエテ聞きづらや聞きにくや。アヽ詞それも道理又あとの月の騒動に。一家が寺へ退いての時見舞に行つて見屆けた。餘のお山衆は押退けて房一人を大事にかけ。地こゝらで心底見せ顔にけばく〳〵しい仕方ども。側に居ゐは知つた衆此方より私が顔。阿呆らしう見えたやらまぶられて歸りしぞや。それに餘り踏み附けた先に房を連れて來て。女どもの女房の印判迄を引き搜し。納戸戸棚も見せさらし是がつたぞ。詞今日の女も房ではない。人選の隱し度い。女子同士に恥を見せ男は寢取られ寢間張臺は見さがされ。阿呆の數々讀みつくされ是でも男の可愛いは。扨も如何なる困果ぞや今日の事が隱居へ聞え。私は親に叱られながら。科を負うて居る心。人間らしい氣があらば三十日の一月を。せめて三日はろく〳〵に寢物語もあれかしと。心一ぱい理をせめて フシ情も。深く口說き泣く千々の。思ぞあはれなる。地徳兵衛一念發起して。詞ハツアあゝ誤つた〳〵。地惡人とも業人とも盜人とも騙りとも。我ながら十罪人今迄も其方に恥ぢ。詞止めう〳〵と思ひしが是程の瀬戸が無うてうか〳〵と盡した。我一人思ひ切れば其方子供隱居のため。兄貴の身上我が身のため男めが後のためもよい。地そこを知らぬ身でもなし明日は伊勢の御緣日。今宵の月に蹴殺され三世の諸佛の御罰を受け。二人の親に冥途から睨み殺さるゝ法もあれ。ふつつと思ひ切

娘を一角で頼うだ。證據には其の銀こゝにありと取出し。地明日直に返辨し向後房とは通路せぬ。今迄心を無下にした恨みもつらみも許してたも。さりとては此の德兵衛女房の罰が當つた。罪を免してくれよとてスエテ手を合せてぞ泣き居たる。地女房莞爾と打笑ひ。詞エ、忝い〳〵。挨拶切つた捨てたのと幾度か聞いたれども。地銀迄見せての誓文とんと心も落付いて。今日から本の夫婦皆悅んでたもやとて フシ嬉し涙を流せしが。地とても事に年寄つて一夜の心も休めたし。大儀ながら隱居へいつて今の誓文一通。聞かせまして下されかし。是は私が御無心御恩に受けうとありければ。何が扨讓り受ければ我が爲にも親同然。ついちよつと行つて來うそんならさうして下さんせ。生薑酒して待ちませうそれ生薑おろしや釜の下。竹は手樽を振つて見る。酒の通路引きかへてオクリ夫は〳〵北へと フシ出でけるが。地辻にてふつと思ひ出し南無三寶。〳〵月ははや。フシ渡り初して。中橋や。六軒義理に詰つた女房のせりふ。尤と胸にこたへしより房が大事をはつたりと忘れたり。入相限に待て待たう此の手筈違うては。生死の出來る銀いや〳〵親仁は明日の事。ちよつと逢うてと立戻る。詞ア、さうもなるまい。たつた今誓文立て殊に銀も手放したり。地先づ此方を仕舞うてのけうか。ハア、可愛や房がどうぞ銀の首尾なつて。卵酒飲むやうにしたい事ぢやと歎きしを。氣遣すなと勇めしが氣の弱い女子なり。こちらはまゝよと又立歸り。思へば〳〵女ども生薑酒して待ちますと。手づから生薑おろしたる志も不便なりと。辻を越えては又戻り。辻に立つたり蹲うたり行くも歸るも定らず。どうせうか斯うしやうが酒いりつく樣に氣がなつて。胸かきまはす卵酒。心を二つに打割つて君が方へと走り行く。後は涙の卵酒霜のしろみに 三重

中之卷

町の小夜格子唐の聖の曰はく。色の德には隣あり向兩側燈火目印に。昨日も今日も。明日の夜も。重井筒の釣瓶縄 フシ手ぐり來いとのよすがかや。地中に不便や房は憂き身のしな〴〵を。心一つに孕句の脇が勇めば。力なく。片目で笑ひ片目には。涙を包む火鉢のもと フシ人待つ宵の火弄りや。地小夜も小六も浮き〳〵と。引裂き紙のひねり元結で火廻を。詞火の字日野絹。房さま何と。私は獨寢ア、いまいまし。緋無垢冷酒引舟火桶。地雲雀 鵯 比叡の山の。檜の枝に。そりや鳥指か。鳥でないぞや身は丙午。詞又房さまのいま〳〵し。地男殺そといふ事か。こちは祝うて姫小松。緋縮緬とく人目のひまに。鬼も來るなと 柊や。雛 鯉 葱エイ酒落くさい。二瀬仲居も小差出で。飯炊は來て火吹竹。料理人迄冷し物。鶯籠の彦兵衛膝頭。柄杓緋緞子 蟆へ。平野苞蕚ひし紬。フシ平野やゑきやう肥後芋莖。地サア〳〵紙燭が皆にな

るなんと房様サァどうぢや。どうぢや〳〵と詰めかけられ。詞アヽかしましい息が出ぬ。物が言はれぬ免してたも。地息が出ずば火屋へやれ。そんなら火箸で燒いて退け。南無三寶火が消えた。サァ房様の灰寄せぢやと。どつと笑ひし戯謔も。フシ明日の哀となりにけり。地火廻半へ飛脚屋が何も御用はござりませぬか。ヤァ房様京へ上す銀もあり。御狀もあるとの御事遣されませぬかと問ひければ。詞アヽよう寄つて下んした。まだ文を書きませぬまちつとしてから來て下され。それなら明日の便になされます。今宵は仕舞でござるといふ。尤なれども今夜上して明日の間に合はせねば。きつう叶はぬ大事の用。地無心ながらまそつとしてま一度寄つて下さんせ。賴みまするとぢぶれども フシ返事もせずに出でにける。地房は心も心ならず日の暮迄の約束が。初夜過ぎ四つのかねてより思うた壺へ當りしと。門に出でて北を見つ濱まで歩み西東。足も冷えて鐵釘をスエテ胸に打たるゝ地幾瀬の思ひ。ヤァ北から人が走つて來るそりや德様よと走り寄り。見れば以前の飛脚屋なり。詞お房様かどれ〳〵御狀は舟が出ます。ヲヽ道理々々此の銀は。京の私が親里へ明日の日中に渡さねば。いかう詰らぬ銀なれども今に先から來ぬわいの。定めていんまに來う程にまそつとしてから來て下され。いや最早や來られませぬ。來てから今夜は地出されませぬと言ひ捨ててこそ歸りけれ。房は一人とほんとして今夜の首尾を達へては。一代京へ繫がれて連添ふ事も限りとは。根掘り知つての上なれば如才のあらう筈もなし。皆おか様のさしこみと思ふも地體こちの無理。身一つ胸を据ゑたればいつそ悲しい事もなしと。内へ歸れば主の内儀房は今迄門にか。詞此の寒いに物好きな。總じて此の中うかく〳〵しやる些と心を締やゝとありければ。されば餘りよそが賑かさに。地格子祝に出ましたと言ひ捨て二階へ上る體。氣懸りなれば目を放さずオクリ折々〳〵心を付けけるが フシ房はそれとも。地白紙の障子の月をあかりにて。剃刀出し合せ砥にかゝらましかばかくとだに。ま一度顏見て死に度いと。思へば引かるゝ後髮スエテ手もわかわなとぞ顫ひける。地主見付けて後より房それは何しやる。詞はつと驚き振返りハァ内儀様の。何ぢややら喫驚としました。餘り良い月影に。地額剃れうと思うてと。紛らかせば打笑ひヲヽ好い所へ來て仕合や。幸ひ旦那殿髭剃つてくれとある。ちと其の剃刀貸してたもと。ひつたくり押包み。暫しは顏を打守り居たりしが。詞アヽ一昨日の煤掃にたんと肩がつかへた。そろ〳〵揉んでたもらぬか。地あいと後に廻りしも扨は氣色を見取られしと。悲しさ怖さいや增して フシ更に分ちもなかりけり。地さすがそれやの女房とて世間話に氣をゆるませ。詞是なう房。いつぞ〳〵と思ひしが序に其方に意見がある。我も初は勤の身。素人の言ふ事

と一つに聞けば曲がない。心靜めて聞いてたも。廓や此處の奉公は樂みなうては勤らず。むけなう堪くではなけれどもそれにさへ猶駈引あり。必ず妻子ある人と末の約束せぬ事ぞ。地男の間男同然にて思ひばかいかぬ物ぞとよ。德兵衛樣とも今は挨拶切つたとある。ヲヽ〳〵仕合々々目出たい事。詞お辰樣を離別させ。添うて其方の本望ならず。いとしい人の身のひし一門中の憎しみ受け。其方を鬼よ蛇よといふ。又園はれて世を忍び後家同然に暮しても。是が何の手柄ぞや若木の花は一盛。老木の枯葉色失せて變るは男の フシ心ぞや。餘のお山衆と違うて十の年から子養にて。豆腐取て來い八百屋へ走れ。駕籠呼んでおじや掃き掃除戸棚の鍵迄預けしは。小いからの刷染だけ我が子のやうに思はれて。良い客もがな出世させ下女の一人も連れさせたう。思ふはこちとばかりかは皆親方は同じ事。譯も無い事仕出して慘い目見せてたもんなや。爲のよい事あるならば今でも暇をくれといや。慾を離れたこれ證據損というて僅かの事。不便な目を見ようかと案じ過しがせらるゝぞや。思ひも寄らぬ憂をかけ必ず泣かせてたもんなと。涙も聲もしめ〳〵と殘る方なき恩の程。房は顏を上げもせず。只あい〳〵としやくり泣きフシ延の。幾重を絞りけり。地客かあらぬか表にてようござりましたといふ聲す。誰樣ぢやと澄して聞けばいかう冷えるが。詞兄貴の氣色變る事も無いかといふ。地ハテ、人事言はゞ廓敷け德兵衛樣さうなと。聞くより胸もさは〳〵と。フシ飛びも下り度き心なり。詞時に丁稚が門口より。向ひの肥後屋から房樣ちやつと送らつしやれ。お客は堺の早う〳〵と呼ばはれば。料理人不審を立て。問ひもせぬお客の斷り合點がいかぬ。房樣はおひまが入るならぬといふを。房聞いて。あれは何故にと問ひければヲヽさればいの。あの宿で德兵衛樣に逢やつた故。それで遣るなと言ひ付けた。エヽ內儀樣の譯もないそれはあつて過ぎた事。地今は挨拶切れた上德樣はこゝになり何の氣遣。堺の客は正月を賴まねばならぬ人。平に遣つて下さんせといふも眞實と思はねども。ヲヽそれもさう是なう房を送ろぞや。と。呼ばれば下にて料理人。そんなら道ちや駕籠へも一寸寄つてくれ。心得太郎兵衛の婆樣と フシ喚いて使は歸りけり。地サア身仕舞して早う行きや。いや夜もいかう更けまする。つい此の儘と連立ち二階下りる間に。駕籠を庭にぞ舁き寄せける德兵衛樣遊んでお歸りなされませと。言へばとぼけた顏つきにて誰ぢや房が。際の商賣跡を詰めやと地よそ〳〵しう。口には言ひて魂は。一つ駕籠なる番ひ鳥 フシ飛び立つばかりに見えにける。地色を悟りて女房是は夜更けて御大儀な。先づお上りなされませいかう冷える酒一つ。それ燗つきややとありければ。詞アヽ置きや〳〵もう歸る。此の頃酒が中つて今も今女ども。

生薑酒をだべさせうと手づから生薑おろすやら。地それが厭さにやう〳〵是へ逃げて参つたに。又酒を飲めとややれ逃げんと。出づる所を女房飛び下り立塞がり。詞なんの無理に進ぜませう茶でも一つ参りませ。いや〳〵此の頃は茶があたります。地今も今さる方で生薑茶をくれたを。やうやうと逃げ延びた是非歸してといふ所へ。詞兄の主寢間より出で。ヤア徳兵衛ようぞ〳〵。夜が寢られぬに夜ととも話さう。サア地こゝへと呼びかくれば病人

といひ兄の命。異議も言はれず不返事に　フシもぢ〳〵してぞ上りける。詞なんと中橋架けたの。欄干渡すばつかり。春は町中渡初氣色も次第に快し。寒明いたら本腹せう是といふが此の夏の。西國の御利生ヤ三十三所の風景。一々語つて聞かせんサアろくにゆるりと居やと。地果しも知れぬ長話徳兵衛心もだ〳〵と。可愛や房を今迄待たせ又宿屋でもあこがれん。早う立ちたさ氣は急いていや申し。今宵は我等伊勢講講中待つて居らるべし。地

罷り歸ると立たんとす先づ待ちや今迄誰が待つものぞ。地まそつと話しやと止められ。いや槍屋町の隱居へ。齋に參る約束是非お歸しと言ひけれども。はて齋は明日の事ひらにといふに詮方なく。女どもが懷姙何時に產致さうも知れず。お戻しなされ下されと言へども兄は聞入れず。遁れぬ方の自身番見舞ひ度う存ずれども。是ではお歸しなされまいあいた〳〵。あいたしこ〳〵。冷える加減か俄に疝氣が起つた。歸つて養生致し度い。はて譯もない。夜氣にあたつて猶痛まう藥でもやらうか。いやもう藥も通らぬ駕籠に乘つて歸り度し。あいた〳〵と呻けども。內儀推して外へとては出すにこそ。小座敷の炬燵に火をたんと入れさせて。泊つてござれと强ひければ。詞いやや〳〵今年の炬燵はいかう人にあたります。今も今女どもが生薑炬燵をしかけて。やう〳〵詫言致したと地心は先へ拔殼の。何を言ふやら譯もなしこゝになりとも寢せませと。蒲團打着せ表には內儀手づから錠おろし。內との者に目くばせしそろ〳〵脇へ退く樣子。ムゝウ氣がついたとそらさぬ顏いや〳〵寒いに往なうより暖かにして泊つたが。先づ此の方の德兵衞と重き心を輕口に。蒲團かぶつて行くふりも涙。くろめし三重へまぎらなりフシ內と外とに。牽き合ひの。心の駒の諸手綱房が思ひの通ふかや。夢とはなしにフシ現なや。地顏を並べて見るやうで抱き付けば小夜蒲團。涙に濡れてひや〳〵と髢ほどけて身にさはる。スエテ其の夜の心地しみ〴〵と。身に引き纏ひ寢て見ても。ひとりころりはエゝ埒が無い。心の內はむしやくしや枕いつそあけてものけても退けよかし。アゝ大幣の此の蒲團。小六も寢つろ小夜も寢つらん。房も寢よう引手數多にどこの誰めと寢くさつた。撲ち度い踏みたい叩きたいゐゝ。〳〵〳〵踏むな蒲團に科もない。今は踏んでも叩いても房に逢はれぬ逢はせぬかと。炬燵にとんと腰も拔け フシわけも。涙に我が身ながら男の。やうにもなかりけり。地戀の寢ばなの屋根續きいつか思ひは山口屋の。物干傳ひ忍び來る餘所の戀かと羨しく。見れば雨戶の戶袋を。そつと踏へる足許もふるひ〳〵の目もくれて。詞ヤア爰にかいの。房か地こればどうぞとばかりにて。炬燵を中に手を取りてフシ只泣くより外の事ぞなき。地涙の中にも男の顏じろ〳〵と見て。アゝいとしほや氣を揉まんす故にやら。顏にたんと膏が來たその苦は誰がさするぞい。皆私ゆゑとそれは〳〵忘るゝ事もあるにこそ。さり乍らもう苦にして下んすな。かういへばどうやら拗ねて言ふに似たれども。微塵もさうした フシ心もなし。詞私が京の父樣よしない者の請に立ち。明日限に銀立てねば私をやるとの判ぢやげな。地私は爰へ身を賣つて先から連に來た時は。二重賣二重判牢舍は鏡にかけた事。ならぬ事をくど〳〵と思ふは愚痴の至りなり。詞先立ち死なんと剃

刀を手に取りは取りたれども。内儀樣に見つけられ得死にもせず居る間に。地こなさんの聲はする向側より呼びに來る。嬉しや先で何事も談合せんと。今迄待ちぼうけになつたれども。一目逢へばこれ本望末賴みない契りなれば。是限り〳〵と逢ふ度毎の觀念今更溜めていふ事なし。貞女を立てるお辰樣の蔑みも恥かしい。仲ようして下さんせ互に生れ代つたら。本妻定めぬ其の先に早う女夫になりませう。言ひ置く事は是ばかりサア〳〵戻つて下さんせと。夫にひしとしがみ付きフシ絶え入る。ばかりに泣き居たり。詞チヽ聞かねど萬事至極した。さり乍ら其の言葉嬉しいやうで恨みあり。本妻あるは知れた事同じ口で諸共に。地死んでくれと言うてたも京の便を大事に思ひ。騙同然の才覺にて銀四百目借出し。一時ばかりは懷中にあつたれども。兎角二人に死脈が揮つどこもかしこも一時に。潮のさいて來る如くばら〳〵と首尾惡く。詞元より理を持つ女ども理窟をつめて恨み泣き。いかな張良樊噲でも道理に向ふ矢先はない。銀も渡す其の場にてみす〳〵嘘の空誓文。地とても通れぬ此の罰佛神を竢たずとも。こちらから當つて埒あけんと道から胴は据つたり。死に直しは二度ならぬ喞ち顏は曲もなし。手に手を取つて莞爾と死ね死なうと言うてたもと。炬燵に顏を打投けて世にあぢきなき涙のてい。ナウさう思うてが定かいの。思ふが不思議か女夫ぢやもの。ほんにさうぢや忝い。嬉しうござると抱き合ひフシ聲を立てすの絞りなき。フシ炭火も。消えて凍るらん。地奥へ斯くとや聞えけん兄の聲にて。詞なんと德兵衛痛みはよいかと。地ごつ〳〵せいて來る音すやれ隱れよと狼狽へて。房を炬燵に押入れ蒲團かぶせて德兵衛は。上にもたれて覆になりフシ顏もきよろ〳〵なりにけり。地程なく主人立出で。詞物言ふ聲の聞えたは誰であつたと不審顏。いやそれは私寢言がな申したか。但しお前が病み耄けて空耳でがな御座りましよ。歸つてお休みなされと言へば。イヤいかう夜が寢にくい地話しさいた西國の。物語して聞かせうとフシ炬燵に當るうたてさよ。地ヤア炬燵の火がうすい。詞これ女房ども火を赫とおこいて。火斗に二三杯持つておじやと呼ばはれば。德兵衛ぎよつとして申し〳〵。火のきついはお毒御無用に遊ばせ。いや〳〵裾が冷える。地膝節の焦ける程ながこちはよいと言ひければ平にそれは火の用心と申し。膝の皿に火が付いたらば御身體の妨と。言へども兄は戀しめと思ひ意地惡う。火を早うフシ持つておじやとぞせがみける。詞アヽ申し。お前は病氣で引籠つて世間を御存じござらぬ。此の冬から火の强い炬燵は廢り物。北脇邊のよい衆は大方炬燵に水を入れるげに御座る。重井筒とも言はるゝ身が氣の通らぬ。炬燵に火を入れなんどとはさりとてはお笑止な。あれおか樣火は入らぬと仰しやると。

地身をもがく其の間に火斗は焦るゝ紅葉葉を。盛つたる如き池田炭遠慮も内儀が炬燵に移し。サア當らんせと言ひ捨てて フシ臺所にぞ出でらるゝ。側で見るさへ德兵衛身も焦げ渡る心地にて。詞兄ぢやや人其の火で熱うはござらぬか。いつその事に火炙にならしやれぬか。こゝ迄火氣が來まする 地といけて消しませうと。寄らんとすれば其の儘置きやと。止められては炬燵より胸を焦すは德兵衛。房は涙の埋火に燒き付けらるゝ身の苦しみ。蒲團のかけより手を出し裾に取付き。堪へんとするに耐へ難き フシ地獄もかくやと不便なり。地主人も一旦懲しめのさのみは哀れと思ふにや。詞アヽ暖まつたもう歸るそなたも休みやと立歸る。地德兵衛兄ながら怨めしく思ひけん。詞とてもの事に眞黑に焦る迄。あたつてお歸りなされかしと。地言へども流石一言も。岩木を分けぬ人心 フシ奥の。一間に入りにけり。地德兵衛は小腹立ち。檜も蒲團も一つに攝んで取つて投ぐれば。咸陽宮の煙の中に顔も手足も紅の。房は目ばかりじろじろと物をも言はず片息の フシ性根も亂るゝばかりなり。地やう〳〵に抱き上げ袂に扇ぎ身をさまし。花活の水幸ひと。顔に注ぎ口濕しスエテ少し心も爽けり。地サア兄貴迄が知られたり。なに面目にのめ〳〵と人に面をまぶられん。いざ此の所で尋常にと脇差取らんとせし所を。さうさへ覺悟極まれば嬉しい〳〵さり乍ら。こゝでなか〳〵思ふやうによもなるまい。屋根傳ひに裏へ拔け樽屋町の門へ下り。宗門なれば日親樣の御門で死なせて下さんせ。ヲヽ尤々有難い志サアおじやと立ちけるが。詞ヤア其方は法華我は淨土。願ふ處が別なれば先の行きはも覺束なし。詞宗旨を變へて一所に行かん今題目を授けてたも。とく〳〵と手を合はすれば房は不覺の涙にくれ。詞私に淨土になれとも言はず法華になつて下んする。地扨も嬉しい心やな勿體ない事なれど。今迄毎日千遍づつ五年唱へた題目の。功德で許したび給へ。と互に合掌心を靜め。今身より佛身に至る迄よく持ち奉る。南無妙法蓮華經。今身より佛身に至る迄添はせたまへ添はせてたべ。南無妙法の力を賴みに。しつかと負うて上る二階や 三重へ屋根の棟。フシ鷲の峯ぞと。地一筋に這うつ辿りつ傳ひ行く。道は三途の瓦葺霜の劍の山冴えて。此處に地獄の鬼瓦左手も右手も恐ろしく。遁れ遁れて行く末は今ぞ冥途の門出と。これを限りの立酒や樽屋町にぞ 三重へ迷ひ行く。

血汐の臘染　下之卷

歌筒井筒井筒の水は。濁らねど。今はナホス涙に フシかき濁す。月も袂に。かき曇る。朝の雲夕の霜仇しが浦の空舟。身をなき物と知りながら。いとし憎しの戲れも。暫し此の岸彼の岸の。スエテ假の現の假橋や。藻に埋もるゝ牡蠣船の。フシ苦の際間の燈火の。風を待つ間の。影よりも。明日迄待たぬ フシ我が命。地我と失ひ兩親の。育てし御恩は

如何せんと歩みもやらず泣き居たり。送り迎ひの色駕籠も小オクリしばし。と絶えはいづくにも馴染々々の寢入りばな。我が身は今宵フシ散り果つる。地名殘盡きせぬ濱側の。歌こゝは竹田か夜は何時ぞ。五つ六つ四つ千日寺の鐘も八つか七つの芝居。二人が噂せば狂言の。仕組の種となるならばフシ我を紺屋の片岡に。地何とか思ひ染川は臺詞に泣いてくれかし。包む袂の飛驒掾。二つつがひの手妻にも。かゝるなりふり移すとも。此の思ひをばよも知らじ。去年のお島の心中の。その井筒屋に我が今フシヒヅミ重井筒と。篠。塚に。スエテいはれ岩井の半四郎。憂ひ臺詞のあやめぐさ。露の音しも御身と我が フシ積る涙の雫かや。西に嵐の闇に暗がりによしなきことを仕出して東の果に名を流す。それに劣らぬ歎きぞとフシいとゞ。思ひに。くれ竹の。節を習ひし淨瑠璃も。餘所の事よと慰みしが ギンオクリ今身の。上に降る霜の一足づつに消え失せて。死にに行く身の フシあぢきなや。地あれ見返れば人聲の。我を尋ねて高津の町を急ぎ。逃るゝ鰐口や。頼みをかけし御經の。ハヅミ此の三界の衆生は。皆これ我が子と聞く時は。親諸共に。到るなりけり南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。五逆の提婆は天王如來。龍女も成佛する時は。煩惱菩提と。なるぞ頼もし南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經。地南無妙法蓮華經。六萬九千三百八十四文字を。フシ只此の七字に納りし。大曼荼羅やまだら雪雨にも風にも詣で來て。朝は現世夕は後世。此の世彼の世の二面今宵。一つに榴の葉の。衆は浮世の塵芥共に命の捨場ぞとスエテ大佛殿の勸進所。フシ身を捨つる。藪となりにけり。地涙に迷ふ其の中にも男は流石男にて。詞なう世間を聞けば女先立ち男は跡に死損ひ。見苦しき沙汰に逢ふ無念の上の死恥ぞや。地先づ我からと脇差を。拔かんとすれば抱き付きなう待つて下さんせ。今死ぬる身と言ひ乍ら大事の夫が目の前で。朱に染まつた體を見ば氣もうろたへ目もくれて。どうしてか死なれうぞ半死して恥曝し。こなさんの死骸の帶解き紐とき打返し。詮議のあるをじろ〳〵とそもや見て居られうか。私から先にと手を持添へスエテ我が身に差當て。忍泣き。男は力涙に迷ひ刄物持つ手も弱々と。女の膝に伏し轉び フシ覆ひ。重なり泣き居たり。地石の鳥居の彼方より女子の泣く聲子の泣く聲。南無三寶我が家の提燈女房子ども家來ども。見付けられては情なし小橋の方で死ぬまいかと。立ち上らんとせし所へはや道端まで尋ね來て。間は僅か半町に足るや足らずも因果の隔て。百里も同じ如くにて。近きかひなき千賀の鹽釜 フシ身をこがすこそ哀れなれ。地妻のお辰は宵よりの涙と霜に袖凍り。物言ふ力もなき中にあれ〳〵夜明けも近付くか。鳥がいかう啼くわいの。詞外の斷落走り者と遠うて明日尋

ねうとは言はれぬ。死にに出た心中なればとくに命はもうない人。地あさましや悲しやな女房子の無い人ならば。殺すまい死ぬまいものとさぞや最期の悔み言。お房が恨みも思ひやる思へば我がある故に。人二人殺すよな位牌に向うて言譯ない。冥途の旅を連立たんと下人が指いたる脇差に。取付く處もぎ放し。詞これは一興此の子はいとしう御座らぬかと。地止むれば小市郎かゝ様死んで下さるなと。歎く聲さへ身にしみて フシ野邊の霜風小夜風。地丁稚の三太もうろ〳〵涙。心中といふものは。いかう寒いものぢやとて フシ共に袖をぞ絞りける。地德兵衛呵きて月は傾く東は白む。ためらうて今の間に見付けられんはあさましし。いざ何事も宵より言うた通りぞや。おうと頷くばかりにて涙に物を言はせつつ。夫の膝をしつかと押へ。仰向き待つたる口の中南無妙法地蓮華經。南無妙法蓮華を一つ蓮華にと。ぐつと突抜く一刀わつと叫びし。一聲の。フシ哀れ果敢なき最期なり。詞今のは何處ぢやサア知れた。地ツメそこかこゝかいや〳〵南に聞えたと。こだまの響は氣も付かず皆生三重玉へと〳〵走りける。地見付けられじと德兵衛畑の中を西東。こゝに屈み彼處に忍び今は嬉しゝ一所にと。房が死骸を尋ね寄る道も心も埋れ井戸。踏み外してかつぱと落ち水のあはれや汲み上げて。重井筒の心中と御法の。水をぞ湛へける。

心中重井筒

右之本令吟覽頌句音節畫譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

大阪高麗橋壹丁目 正本屋 山本九兵衛版

山本九右衛門版